山口・長登（ながのぼり）銅山跡

1　所在地　山口県美祢郡美東町長登

2　調査期間　第Ⅱ期第四年次調査　一九九五年（平7）一二月～一九九六年三月

3　発掘機関　美東町教育委員会

4　調査担当者　池田善文・森田孝一

5　遺跡の種類　銅生産官衙

6　遺跡の年代　八世紀初頭～一一世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

長登銅山跡は、山口県のほぼ中央部の秋吉台国定公園の東南麓に位置する。石灰岩台地に花崗班岩が貫入して、接触交代鉱床（スカルン鉱床）を形成せしめたもので、古代から昭和期にかかる大小二三カ所の遺跡群（採鉱跡、製錬跡）がある。このうち、長登集落から西方の大切谷一帯が古代の遺跡で、狭義の長登銅山跡として発掘調査対象にしている。

（山　口）

調査は、一九八九年度から本格的な発掘を開始して、これまでに約一〇haの中に二五カ所の小規模な試掘坑を設け、製錬遺跡の範囲と旧地形を探ってきた。検出された遺構は、粘土採掘坑群二、選鉱場跡、製錬所跡六カ所（炉跡一六）、人工的な谷溝三などがあり、出土遺物には、官人や工人、雇夫などの使用した日常雑器の須恵器、土師器、緑釉陶器、製塩土器、黒色土器などの外、多数の木簡（『木簡研究』一三・一四で紹介）や木製品、鹿・猪の骨、骨製品、土錘、鉄製品、動植物遺体、製錬関係遺物の炉壁片、羽口、要石、握槌、砥石、鉱石残片、からみ（流状・椀型・木炭含塊状・円盤型の形態がある）などがある。

しかし、未だ建物遺構の検出に至っておらず、第Ⅲ期調査を一九九六年度から三年間の計画で継続中である。

一九九五年度の調査は、国庫補助事業としての重要遺跡確認調査の第Ⅱ期第四年次にあたる。旧地形の把握を目的として、八世紀初頭に開発されたであろうと推定される大切谷の谷頭にトレンチ（大切ⅡC区3T）を設定して、谷の土層堆積状況の把握を行なった。

この結果、東西に連なる大溝を検出し、溝堆積層の中から須恵器、土師器片、木製のザルや瓢箪、馬頭骨、木製品などとともに、「駿王野」「牙」などの墨書土器や木簡三点が出土した。

木簡は、地表下一～一・五m、標高一六五m前後のレベルにあり、

青灰色粘土層に属す。各々単体で出土し、西もしくは北側の上流から流入して堆積したと考えられる出土状況を呈し、(1)の木簡は裏面を上に、(2)は側面を上にして出土した。(3)は、一九九四年度に大切ⅡC区4Tから出土した木簡であるが、ⅡC区3Tの東に連なる大溝の下流にあたり、木簡(2)の出土地点から東二〇mの地点にあたるので、今回ともに報告する。東西大溝の最下層である黄褐色砂層から「長神人」の面を表にして出土した。これらの木簡は、いずれも下面の墨痕の残存状況が良好であるので、廃棄当時の溝が開口して機能していたことが窺われる。時期は八世紀。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈　　額田マ万呂　　十月九日　　」　　189×33×7　032

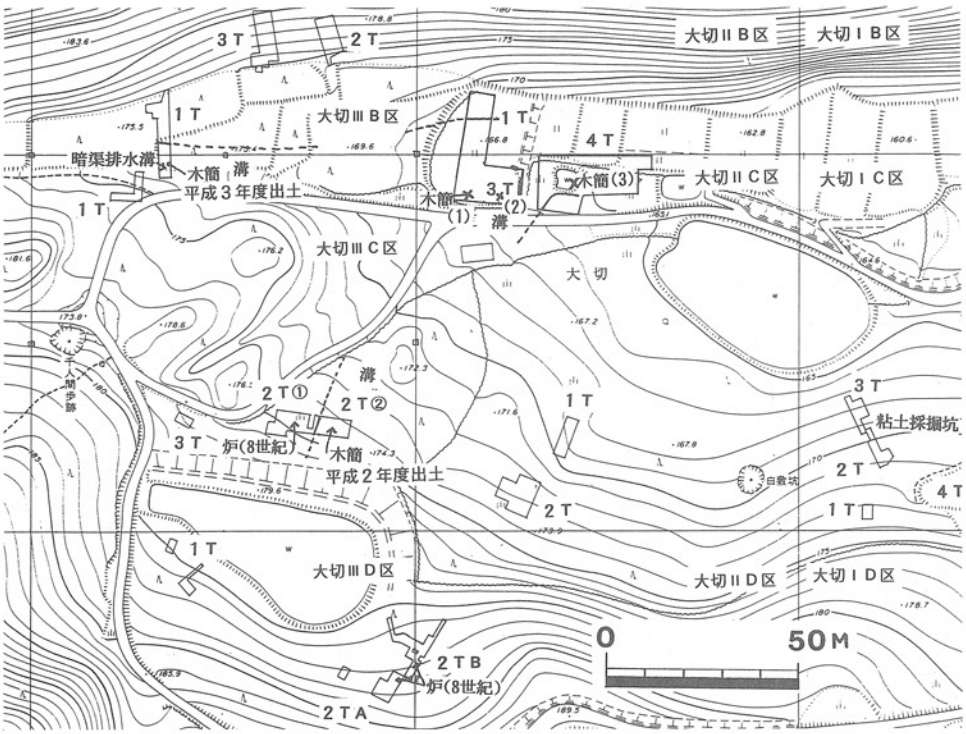
・「〈□□□□　　」〔枚カ〕

(2)　「〈下神マ小□□廿二斤枚二　七月十日」　　164×27×6　032

(3)　・厚佐加三鳥額マ

・□〈軸□□〔鑒カ〕　　(199)×(28)×3　081

(1)は雑木板目材。上下端部はキリオリ技法であるが、側面から斜交してキリを入れ若干の削り調整を施す。側面は削り調整で切り込



木簡出土地点

みはキリカキ技法、表裏面に削り調整がある。(2)は雑木板目材。上下端部はキリオリ技法のまま、側面はキリワリのままで切り込みはキリオトシである。表面に若干の削り調整があり、中程に二次的な折れヒビが入っている。裏面はほぼ未調整。(3)は杉の柾目材で、一側面にキリワリがあるが、他側面と上下端は二次的割損、折損である。表裏面に若干の削り調整があり、発掘時の傷痕が見られる。

(2)は、技術者工人の下神部が製錬した銅の付札で、銅二二斤を二枚にして七月十日に長登製銅官衙の長官に納入したものといえる。下神部の名前は、銅イオンの染みが著しく赤外線でも「小□□」としか判読できないが、今後の染み抜きと時間の経過によってより鮮明になる可能性がある。(1)も同様の木簡と把握でき、「額田マ万呂」が納入したもの。斤数は裏面に記載があったと推定されるが、墨痕が僅かに認められる程度で定かではない。ただ厚みが七㎜前後を測り丈夫な作りであるので、従前の銅付札木簡と同類である。

なお、(2)の銅インゴットの重量は一枚平均一一斤で、約五㎏となり、一九九〇年に出土した同類の木簡は一枚平均三六～三八斤であるので、これに比べ単位量が非常に少ない。正倉院文書によると、熟銅の平均は四〇斤、未熟銅が三六斤、生銅一二斤となり、(2)は生銅の付札の可能性が指摘できる。(1)(2)ともに提出月日が明確である点、従前の木簡には見られない新たな知見であるが、毎月一〇日前後が提出期限であったものかどうか、今後の課題となり得る。

(3)は、銅イオンなどの汚れが著しい部分があったため、ＥＤＴＡ二％溶液に約一週間浸し、その後は水道水で保存していたが、約六ヵ月後には全体の染みがきれいに取り除かれ、一部判然としなかった文字が鮮明となり功を奏した。木簡の処理方法に一考を促した木簡である。「厚佐」は地名で長門国の厚狭郡か厚狭郷を指したものと解せるが、「加」の意味が不詳である。「額マ」も地名とみると豊浦郡に額部郷がある。木簡の右側が割損していて、「三鳥」の文字が幾分小さいので、この右側に文字が併記されていた可能性もある。三鳥と何かの品を加えたものか。「額マ」の下は損傷が著しく墨痕不明。裏側には、逆さ書きの「□□長神人□」が判読できるが、意味不詳。人名か職身分を表すものと考えられる。

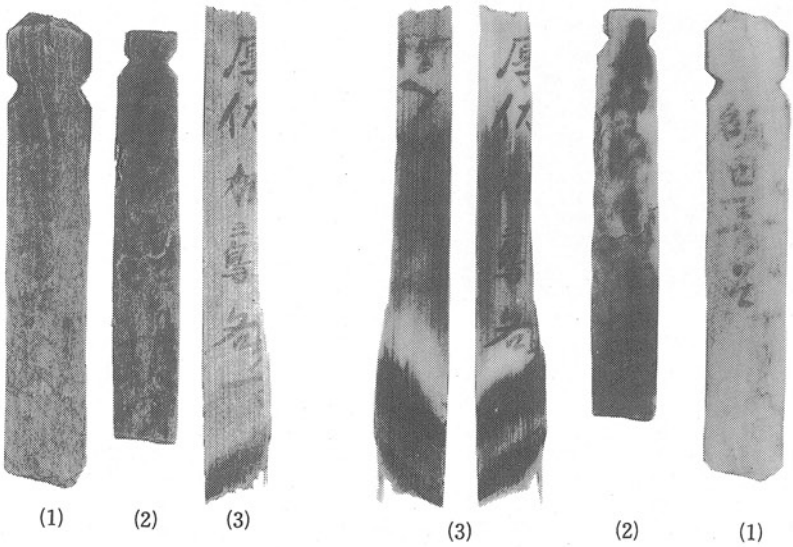
以上、銅生産関連の新たな資料を追加したが、長登銅山跡は継続調査中であり、一九九六年度の調査で更に多数の木簡出土が予測される。類例の増加や新知見が期待されるところである。

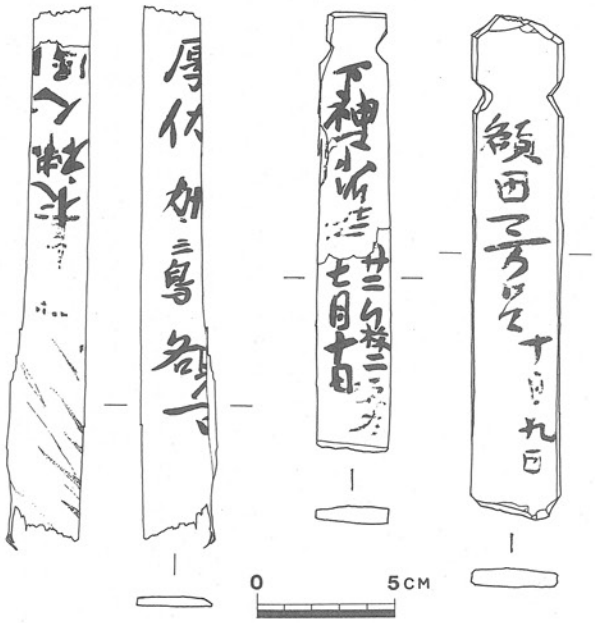
なお、木簡の釈読には、八木　充氏、佐藤　信氏のご教示を得た。

9　関係文献

美東町教育委員会『長登銅山跡Ⅱ』（一九九三年）

（池田善文）





木簡実測図